

る類は、いづれもひろく此國の原野をさしたるにて、其所を定たるには非なるべし、吾妻鏡、太平記等に、むさし野といへるを、父によりて考ふれば、多摩郡より入間郡に連たる地とおぼしく、一國にかゝりていひたる事とは聞えず、北國紀行に、むさし野の東のさかひ忍岡と云るし、回國雜記には、むさし野の下に、野火留塚を云るしたるに、據れば、豊島新座まさしくむさし野の内と見ゆれば、丙辰紀行、地名考等の説は、これによりたる事と覺ゆ、また今入間郡のうちに、武藏野郷と稱するもの、上下赤坂、上下松原、大井、藤窪、龜窪、竹間澤、鶴ヶ岡、大塚、同新田、片柳新田、十二村あり、又むさし野十七ヶ新田といひて、久米新田、安松新田、所澤新田、岩岡新田、下田新田、堀金新田、中新田、堀の内新田、加佐志新田、三ヶ島新田、諸岡新田、猿新田、長窪新田等の村々いできて、四村の名らず、猶も下留村のほとりに、榊林、大野原など、むかしの武藏野の僅に存せるさへ、めぐり三里にあまるといひ、又今も多摩郡に野方領あり、又中野といへる村三所、小野といふ村二所、其餘日野、原野、入野、野津、野鹽、野口、野上、野邊などの村名あるを見れば、むかしは多摩入間の二郡ことに多く、原野なりしと見えたり、續古今集、下野の歌に、逢ふ人にとへどかはらぬおなじ名のいくかになりぬむさしの、原、又新後拾遺集、源賴康の歌にも、草枕あまた旅寐をかぞへてもまだむさしのの末ぞ残れる、などたとひみづから其地にいたらぬ人の、遠想してよめるにもせよ、そのかみのありさま、おのづからおもひやるべし、今も土人むさし野八百里と、もろこしにいひ傳ふるなどの説を誇り説も、その廣きかたちはおしはかるべし、よてむさしの十郡に跨るともいふべきにや、

〔更科日記〕今は武藏の國になりぬ、ことにをかしき所も見えず、はまもすなご云ろくなどもなく、こひぢのやうにて、むらさき生ときく野も、あし萩のみたかくおひて、馬にのりて、ゆみもたるすゑみえぬまで、高くおひしげり、中をわけゆくに、たけしばといふ寺あり、